



新体制スタート!! 関学「新基本構想」策定プロジェクト始動

教育環境激変の今、私達の母校、関西学院はまさに生まれ変わろうとしています。

そのさ中、大きな使命を帯びて新しく就任された、森下洋一理事長、杉原左右一学長、そして、大橋太郎同窓会長が一堂に揃われ、公器、関学のステイタスアップを目指す熱い思いを語っていただきました。(文中敬称略)

■プロフィール

おおはし たろう
大橋 太郎 (写真左)

1939年 生まれ
1962年 関西学院大学商学部卒業
京阪神急行電鉄株式会社
(後の阪急電鉄) 入社
1999年 同社代表取締役社長
2003年 同社代表取締役会長
2005年 同社相談役
2008年 関西学院同窓会長

趣味 鉄道マニアで分類は「模型鉄」
スポーツ観戦

もりした よういち
森下 洋一 (写真中)

1934年 生まれ
1957年 関西学院大学商学部卒業
1957年 松下電器産業株式会社入社
1993年 同社代表取締役社長
2000年 同社代表取締役会長
2006年 同社相談役
関西学院同窓会長
2007年 関西学院副理事長
2008年 関西学院理事長

趣味 旅行・ゴルフ

すぎはら そういち
杉原 左右一 (写真右)

1945年 生まれ
1968年 関西学院大学理学部卒業
1970年 関西学院大学大学院商学研究
科修士課程修了
1973年 同研究科博士課程単位取得
1987年 商学博士の学位取得
1994年 学生部長、その後商学部長、
総合教育研究室長、図書館長
などを歴任
2008年 関西学院大学学長

趣味 気象予報と短歌・俳句

——早速ですが、まず森下理事長から就任にあたっての課題と抱負などをお聞かせください。

❖❖❖「一番に」選ばれる大学に

森下 四月に理事長に就任したとき、教育機関の環境が少子化、全入時代など、近年急激に変化をしている中で、学校法人関西学院としてどう対応しなければならぬかについて、次のようなメッセージを出しました。

第一に、関西学院大学が世の中のあらゆるステークホルダーから「一番に」選ばれる大学というステイタスを得ることです。

受験生から一番に選ばれるためには、どういう学生が何を求めて関西学院大学に入ってくるのか、その入り口である入試のあるべき姿はどうかを考えなければなりません。そして、学部なり大学院を卒業した学生がどういう企業や自治体などにどう就職していくかも大切です。

合格したいくつかの大学の中から関学を一番に選んで入学してきた学生が今度社会から一番に選ばれて就職していく。四年なり六年の間にそういう教育を受け、学問を修め、クラブ活動などを通じて、「一番に選ばれる人材」を育成し輩出する、そういう関西学院大学を目指そう。

そのようなことを最初のメッセージにしました。

大橋 一番に選ばれる関学としてステイタスを高めるには教職員、学生が一体となって、頑張られるのと同じように、卒業生も、ああ、なるほど関学OB・OGは素晴らしい、という評価を得るように頑張っていたことが大事です。ただ、この競争の激しい中で関学の卒業生だけが勝ち抜けるかどうかわからない。そのためには現役の学生諸君にも頑張ってもらおうという、両面でステイタスを高めるように努力していかなければと思うのです。

杉原 そのとおりだと思います。同窓会の皆様が頑張っておられるのがわれわれの頼りになり、それを見て教授陣も

学生も頑張ろうと思ひ、逆に大学が頑張っているというのが頼りになってOB・OGも頑張っていただけ、という形になれば良いと思います。

❖❖❖関学「新基本構想」策定プロジェクトが始動

森下 今、就職のときに相対的に言われるのは、関学の卒業生はスマートで、仕事を要領良く無難にこなす柔軟性があるといった良いところはあるが、気骨がない、ガッツがない、逆境に弱い、チャレンジ精神が薄いと、問題解決力が弱いと。社会はよく見ているのです。私はこれからそういう面が高い評価に変わるような教育に、もっと力点を置かなければならないと思います。

大橋 おっしゃるとおり、ガッツが足りないというのは、そのとおりかもしれませんが、そこを重視するあまり関学生として高く評価されている部分が弱くなっていると、関学の魅力というのが全く無くなると思いますのでね。

もう一つは、これだけ学校が大きくなると、マンツーマンの教育はなかなか難しいかもしれませんが、ぜひ一人ひとりに目をかけていただけるような、きめ細やかな教育をしていただきたいと、強く思っています。

杉原 関学は非常に良い点をたくさん持っている反面、弱い面もあるかと思ひます。

今、関西学院の新基本構想の策定準備を進めておりますが、関学の *Mastery for Service* の理念を踏まえながら、新しい関学の創出、新たな出発に向けて教職員一丸となってベクトルを合わせて進んで行きたいと思ひています。

森下 教育を取り巻く環境が大きく変化している中で学長も私も指名されたわけで、やらなければならぬ共通課題がたくさんあります。関西学院の新基本構想では、将来の関西学院、特に大学をどういう大学にしていけばよいかという課題を、法人、大学が一枚岩になって認識を共有し、根っこから再構築しています。夏休み以降本格的にスタッフ、

先生方、それにわれわれ両トップも中核的に参画しながら、将来の関西学院の方向づけをまとめていきます。

遅くとも二〇〇九年度のスタートまでには、将来こういう大学を目指すという一〇年先のビジョンを盛り込んだ新中長期プランを約二〇万の同窓会員にもきちっと報告したいと思っています。

❖❖❖ 何を練達し、何でもって社会に貢献するか ❖❖❖

森下 スクールモットー「Mastery for Services」は「奉仕のための練達」と訳されていますが、趣旨は、「あなたは何を練達して社会の役に立つのか」ということです。自分は将来弁護士になろう、自分で会社を経営して、いや、地方自治体で地域に貢献を、あるいは技術者として、と。

その「何でもって」のところを、できれば一回生の時から漠然とでも良いから意識を持って「そのために四年間こういうことを学ぶのだ」という目標を少しでも早く持つことが望ましいですね。この「何をもって」というところを指導の面でも、もう少し付け加えると学生の意識が高くなると思います。



大橋 単なる生活のためのお金を稼ぐのではなくて、どんな分野についてもきちっと社会に貢献しているのだ、ということを生に認識してもらうことが必要ですね。「仕方がないからこれをする」ではなく

て、その仕事に生きがいや価値をどう認めるかを考えさせる教育があっても良いですね。

杉原 学生は、将来こういうことをやっていきたいというイメージを内面では持っていると思いますが、われわれが引っ張っていかないとなかなか明確には出てこないのも確かだと思います。

チャペルなどの時間帯だけではなくて、「何でもって貢献するのか」を教職員が常に考えさせる意識を持って学生に接することが大事だと思います。

森下 これは関学だけではなくて、日本の教育界そのものの課題でもあります。大学で「何になりたいのか」を常に議論する場があって良いと思いますね。

アメリカの場合は、こういう職業を求めするためにこの大学へ来たとか、それがはっきりしていると言われますね。

杉原 明確なものがありますね。そういう点では関学はライフデザインプログラム（*下段欄外参照）など、独自の取り組みを持っておりまして、これにはさらに力を入れていく必要があると思います。

大橋 私も「Mastery for Service」の意味が分かってきたのは会社へ入ってしばらく経ってからですね。私の会社はサービス業ですから、一体だれの目線で仕事をするのかということから始まって、この「Mastery for Service」の真の意味が理解—まだ完全には理解していないかも知りませんが—できるようになりました。お客様の目線ということですね。

森下 先生方も建学の理念を自分流にもう一度かみ砕いて、学生には、「身につけた実力はどの分野で発揮するのか、発揮するためには、今こういうことを準備しておかなければいけない」というぐらいまでブレークダウンして指導していただいたなら、学生の理解が深められると思います。理念を現代の学生に分かりやすく説明する文章が必要なのでしょね。

新しい基本構想ではミッションを明確にして、分かりやすい言葉で具体的に示せるように進めています。

* ライフデザインプログラム 学生一人ひとりが「自分の将来をいかに生きるか」「どのような職業につくべきか」といった人生観、職業観など将来のビジョンを明確にし、その実現のために必要な能力を身につける体系的なプログラム。

杉原 そうですね。Mastery for Service が単なるスローガンで終わってしまわないように、例えば卒業生をライブデザインプログラムなどにもどんどん呼びびして、Mastery for Service の理念が実社会でどう役に立っているのかというようなことを、経験をもとに学生にご指導いただく機会をもっと作っていききたいですね。

今、進めている新しい関学の基本構想作りでは、関学のミッションから始めて、大きい流れの中で建学の精神なども再度視座をはっきりさせた上で、ベクトルを合わせて、使命感を持って教育に当たり、学生を育てていく、そういう一つの流れをつくりたいと思っています。

基礎学力、創造力、問題解決力を養う

杉原 学長としては、まず学生に基礎学力をつけたいと思っています。私自身は理系を出て文系に進みましたので、文理の融合ということをごく自然に考えている人間です。

第一には、今関学は文系が中心ですが、理系の物の考え方も教育に組み込んで、物事を解決する能力などを幅広く身につけるような教育を低学年から行いたいと思います。

第二には、その上に立って高学年の専門課程のところでは、つきりと独創性の萌芽の見えるような勉学のプランを提示したいと思っています。

三番目は、教育にはやはり時間がかかると思います。私たちが努力していれば、やがて、恐らく卒業後であると思えますが、関学で学んだことの意味が分かるときが来る、ということを教職員ともども強く意識して、日々の歩みは小さいかもしれませんが、教育に携わっていききたいと思っています。

森下 学長のお話のとおり一、二回生の内に大学生として必要な、高等学校の延長線上ではない基礎能力をきっちり身につけることが学生自身にとって非常にプラスになると思っています。

それとゼミですね。ゼミという小集団で先生と学生とが共通のテーマを通して一枚岩になる。それは専門能力や論理的な解決能力といった学問の探求としても大事だけでなく、そのときの先生と学生の人間味溢れる交流に意義があります。わずか2年間だけでも一〇年、二〇年経つて



も、「私は誰々先生のゼミ生であのときはこうだった」と経験を話せることは、強みですね。

もう一点は、コミュニケーション、言い換えればチーム力ですね。社会へ出ると、たとえ自分一人で研究する科学者といえども実際はチー

ム力なのです。万能細胞の京大の山中教授の研究は素晴らしいけれど、そのチームもリーダーも素晴らしいから成功したわけで、何をするにもチーム力が問われます。

そういう意味では、文化部でも運動部でも良いから何かクラブ活動に所属することを推奨するという、今でもそれは積極的に勧めていただいています。さらにもう一段、力を入れていただければ素晴らしい学生が育ってくれると大いに期待しています。社会はそういう経験をした人間を求めています。

人生の出会いを大切に



杉原 コミュニケーション能力つまり人と関わる能力を身につけることは学問と同じぐらいに重要です。また四年間で、かけがえない人生の師や大切な友人と出会ったりというような、人間的なつながりも関学で見つけてほしいですね。

大橋 人とのつながりというのは、それによって協調性が培われたり、社会の中でうまくやっていける社会性といった能力が身につくのでとても重要です。

一般的に今の学生は自分が社会の一員だという感覚が欠如しているように感じることがあります。

杉原 社会の構成員だという自覚が足りないのですね。

大橋 もちろん地域や社会の一員として立派にやっておられる学生もいますが、何か世の中と遊離しているような感じの学生も多いのではないのでしょうか。

それは学校で学ぶのか、それとも家庭や社会で学ぶべきなのか意見はありますが、大学でいえば、そういう感覚は、恐らくゼミなり、クラブ活動で身につくのだと思います。

関学を母なる港に

杉原 私はOB・OGの皆様には母校関学を「母港」にし

ていただきたいと思えますね。社会で活躍されている卒業生が、もう一度エネルギーを充填したいというようなときに、ぜひ関学を母なる港にして、人生のキャリアパスの中で必要に応じて関学に戻っていただいて、母校の充実した生涯学習プログラム（*下段欄外参照）などを活用してエネルギーを再度充填し、心も充実させて、またMastery for Serviceの精神で頑張るぞという気持ちを再確認する、そのような港であってほしいと強く思います。

—— 母校通信を読まれるOB・OGの多くが、今、ビジネスの最前線におられます。そうした方々にメッセージをお願いします

大きな志を持ちチャレンジを

森下 今、ビジネス界におられる関学の卒業生の方々には「今、どの様な仕事に携わられていても志を高く持ち続けていたきたい」と申し上げたいですね。

人生の基本はどんな小さな問題でも志と使命感を高く持つて事に当たるところからスタートすると思います。

自分で掲げた目標に対して自分をいじめてチャレンジすることで使命感がわくもとなり、使命感がわいてくると自然とリーダーシップが出てきます。リーダーシップなんて、こうしたら持てるというものではないと思います。志と使命感が高くなればなるほど結果的にリーダーシップが出てきて、そこに人望が集まる。そして周りの人が応援してくれる、という好循環が生まれてきますね。

だから、「高く、大きな志を持って」「それに向かってチャレンジを」とビジネス現役の皆様には言いたいです。その活躍が関学のステイタスを高めることになるのです。

五年ほど前から、東京と梅田で三日月塾（*下段欄外参照）が開かれていて、講師は関学経済人会の七人ほどが交代で話をされます。参加者は三五歳前後の二〇数人ですが、

皆さん、いろいろ悩んでいるときなので、そこでこういう具体的な体験談をお話しすると、帰るころには皆、すっきりした顔をしていますね。

杉原 「志を」というお話ですが、私も入学式で今年の新入生に「夢を持ち、大志を抱け」とメッセージを贈りました。

夢や大志を持っていれば、さまざまな人との出会いの中で、チャンスを与えられたら自分でチャレンジして前へ前へ進んで行ける、そういうポテンシャルが育っていくと思います。

—— 大橋会長は学生時代から鉄道会社に入りたいという志を持っておられたのでしょうか。

仕事は誠実に

大橋 志は持っていましたね。私は小さいころからの鉄道マニアで、鉄道が好きで入ったのです。入社して一年四月ほど車掌、運転士をして、その後も現場に残りたかったのですが、本社の経理に配属されました。商学部出身だったからでしょうか。それから一九年間その部署で塩漬けという感じだったのですが、役員になってからは、不動産の担当、広報、人事、次は労務担当と、年をとってからいろいろ勉強するのはかなわないなと思ったこともありましたが、好きで入った会社ですから、何でも興味があって、仕事を苦に思ったことは全くなかったです。

とにかく私は「仕事は誠実に」を心掛けました。誠実というのは私流に言えば、一つは人よりも多く仕事をすること、これはもう絶対ですよ。

もう一つは、仕事の中身について、自ら疑問を持ち、問題提起しながら仕事をするということ。私はこの二つを守っていたことだと思います。評価は後でついてくるものです。

—— ビジネスの一線を退かれた団塊の世代以上の皆様へひとこと。

人生三毛作、三毛作

大橋 われわれの世代はもう大体リタイアして、同期生も皆好きなことをしているのですけれども、私はやはり趣味を持つべきだと思いますね。

森下 今、人生三毛作と言われています。今まで職場や立場などいろいろな制約の中でやってこられた団塊の世代以上の方がリタイアを迎えて三毛作目に入られたわけです。制約の無い今は、自分流の持てるパワーを存分に発揮して八〇歳から先の三毛作までやってほしいと思います。

私も後期高齢者の手前ですが、自分の三毛作目の人生だと思って、いろいろなことをお引き受けしています。小さい



い大きいとは別として、どんな形でもいいから社会のために何らかの三毛作目を生かしてほしいですね。

ボランティアでも、どんな活動でも結構、社会のために大いに三毛作、三毛作をやっていきましょう。それもステイタスを高めることになりませんから。

関学のステイタスを高める同窓会活動を

大橋 同窓会の活動では非常に熱心な方がたくさんおられ、ありがたいと感じています。しかし、その一方で同窓生の中には、関学の卒業生であるという意識はきちっと持っておられるのですが、同窓会員であるという感覚がちょっと薄い方もおられるように思います。そんな方を同窓会員として同窓会の活動に関心を持っていただき、参加してもらえそうな方策を考えたいと、暗中模索しているところです。

第二は女性の同窓生に同窓会の活動へももっともって参加していただいて全体の活動の活発化に貢献していただきたいし、そのあたりをOGにどう伝えるかでしょうね。

先日、芦屋と神戸の支部総会に出席させていただきましたが、芦屋支部は平成卒の若い女性がたくさん参加しておられました。同窓会活動に若い方が加われば支部も華やかになり、活力も出てくると思うのですよ。支部によってばらつきがあるかもしれませんが、支部活動にもOGがどんどん入っていただけるような良い方策があればなと思っています。

最近の女性は物おじされませんし、ずばりずばりと何でもやっていただけだと思うので、そういう形に各支部がなれば良いと感じています。

杉原 静岡支部と高槻、その前は芦屋と神戸支部の同窓会に参加しました。どの会場でも、OGの方々が雰囲気良く運営に協力されていたので非常に感心しました。

森下 それは、良いことですね。私は同窓会長をお引き受けしたとき、老・壮・青、男女のバランスのとれた活性化を図ってほしいという方針を打ち出したのですが、大橋会長にぜひ具現化していただきたいと思っています。

杉原 最近ではゼミでも女性が活発です。卒業式で各学部の新卒に女子が並んでいる中に、男子がおりますとすごい拍手を受けるような状況です。



口に四川地震とミャンマーの水害の募金箱が置いてありました。

学院も上ヶ原で地域との共生に気を使っておられると聞いておりますが、その共生の部分で同窓会も何か一役買えるのではないかと考えたことも考えています。

—— 関学の同窓会のボランティア組織のようなものを作られたら、全国でかなりの活動ができると思います。

森下 今、進めている「新基本構想」策定プロジェクトのプランの中期にあたる一二五周年には同窓会と周年事業募金母体である教育振興会の委員の皆さんで募金推進母体を作っていただいて、一二五周年には同窓生の皆さま方にも母校へ帰って来ていただくぐらいのつもりで大いに募金に参画をしてもらいたいと思っています。

また大橋会長にはその節にはいろいろとご推進をお願い

大橋 約二〇万人もおられる同窓会は母校や同窓生のためだけのものではなくて、同窓会の活動自体が関学の評価を高め社会に貢献していきけるような活動をしていけるのではないかと思います。

この間、神戸支部を訪問したときにも出

しなければなりません。

社会的公器としての関西学院が問われる

森下 今、一般の企業でもCSRと呼ばれる社会的責任が問われていますが、教育機関は、私立、公立を問わず、優秀な人材を育てるという崇高な使命を帯びた社会の公器です。お金の面でも学生生徒納付金や補助金など、公のお金を最大限に効果的に使っていかなければならないという、そういうミッションを与えられていると思います。

何事においても公器という立場からの見方をしなければいけないと、いろいろな意味で話をしているのです。だいぶ理解していただいているところですよ。

大橋 私なりの考えでは、学院にとって学生はお客様でもあり、資産でもあります。その資産価値を高めるといふ責任が大学には絶対あると思いますね。

集団である限り、大勢いれば、多少ばらつきはありますが、そのロス密度を抑え、一定のレベルを維持することを頭に置いていただきたいですね。

森下 何十年ぶりで学院に通うようになって、改めて日本の大学では他にないような美しいキャンパスを再認識しましたね。この素晴らしさはやはりいろんなメディアを通じてもっとアピールし、PRすることも必要ですね。

杉原 そうなのです。オープンキャンパスで見学に来る高校生達も一様にみんな感動するようです。

森下 皮肉な言い方をすると、あまりキャンパスが素晴らし過ぎて、のんびりしているのではないかと。

大橋 われわれの時代、上ヶ原牧場とか言ってますね。(笑い)

自由にモノが言える関学

—— 学長にお聞きしますが一般論として大学は、何か象牙の塔とか閉鎖的とか、神聖にして侵すべからずのような

雰囲気があるのではと言われます。改革をということになりますと、お役目も大変だと思えますが。

杉原 こと関学に関しては、構成員全体が自分の意見を自由に言える、すばらしい大学であると思います。

特に新基本構想作りのような、ベクトルを合わせて動くという大事な時には皆さんが意見を出し合う自由さがぜひとも必要ですし、そのような素地が十分あるのではないかと思います。

ぜひ皆で頑張りたいと思います。

力を結集しよう

森下 大橋 そうですね。皆で力を結集して頑張りましょう。

—— 理事長と学長とのお考えがピッタリ合っておられ、同窓会長も同じ思いでいらつしゃって、何か新しい関西学院大学が誕生しそうで、ワクワクしながら聞かせていただきました。これからの楽しみです。是非また、1年後にもう一度、皆さんにお集まり願って、取材をさせていただきますと思います。

森下、杉原、大橋 是非やりましょう。

—— 本日はありがとうございました。

